

No.7 伊藤 誠 —無題—

Makoto Ito

北川フラムさんのコラム / 1995 (平成7) 年 8月15日付 立川市市報記事より

道路に面したコーナーのペDESTリアン・デッキの階段と支柱に囲まれたドライエリアの上、さらに駐車場出口というのが、伊藤誠に与えられた場所だ。

これは普通、美術作品が展示されるような場所ではない、ごみがたまるような暗い建築上のデッドスペースだ。ファーレ立川ではそんな場所を多くのアーティストたちが見事な空間に変えているが、ここは、その中でも、出色の出来栄で、明るい魅力ある空間になっている。

公園や建築物に囲まれた広場に、大きな美術作品が置かれることが多いが、都市の中の美術の展開や可能性はもっと多いはずだ。美術があることで、よみがえる場所を探すのも、美術家の楽しい仕事になってくる。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

今回のプロジェクトについて最もユニークな点は何か。何がこの問題をととても興味深いものに行っているのだろうか、ということをもまず初めに考えた。

彫刻は、建築がそれにかかわる人の生活に影響力をおよぼすのと同様に、その形態以外の見えない部分のひろがりや支配力を持っているはずだ。

普通は、建築の中に彫刻が置かれる場合、あらかじめ彫刻の置かれる場所が「建築の中の彫刻を見る場所」として設定されてくるので、形態以外のひろがりを持ち得ない場合が多いのではないだろうか。ところが今回のように、建築の機能に直接かかわる場所、あるいはデッドスペースにかかわることで、その彫刻の支配性がより明確になるのではないかと思った。

デッドスペースというのは建築の機能上の問題だ。犬やネコにとっては、むしろ「ライブスペース」である方が多い。つまり、それだけ創造力が入り込む余地のある場所であると考えべきだろう。具体的には、私は緑川通りに面したペDESTリアンデッキの下のドライエリアにかかわったのだが、この場所はともすれば放置自転車でも置かれかねない空間だ。

このような場合はよく植え込みや花壇などで対処することが多いが、今回はそれとはまったく別のコンセプトを立てるべきだと思った。彫刻を置いて場所をふさいでしまうのではなく、このデッドスペース自体が逆に建築全体を仕切ってしまうような場にできないだろうか。

私はドライエリアか建物に接している空間とデッキの柱の形状をできるだけ見せることにした。特にドライエリアを隠してしまうのではなく、積極的に見せることで、より建築全体について創造力をかきたてるものになるのではないかと思い、現在のプランに至った。